



1

衆人しゅうじんが学校からもどると、フチ（おばあさんへの尊称）はテレビのまえで、いつものようにアイヌ模様のししゅうに熱中していた。

「ただいまっ」

「あら、おそかったね」

へんじのわりには、ごきげんだ。

「うん、いいことありそうな気がして、走って帰ってきたんだよ」

「そうだったの。わしが待ちくたびれておそく感じたのかねえ。でもいい勘してる」

フチは手にした茶封筒をヒラッとさせていった。

「あなたにお小遣いあげる」

千円札を数枚さし出した。お正月でもないのに、多すぎる。封筒にはまだなん枚かの札がありそうだった。フチがお金をたくさん持っているときは、川辺トキアシアイヌ記念館で観光客にウポポ（歌と踊り）を披露したからだ。いま記念館は三代目の慧さとしさんが館長だ。

「いや。慧は怒っていた。絢子あやこばばからもらった」
衆人にはなんのことかわからない。

「今日、学生さんたちが絢子ばばときてさ。なんだか調べたいといって、おしっこ採っていった」

フチが説明した。

「それで三千円もらったの？」

「いや五千円」